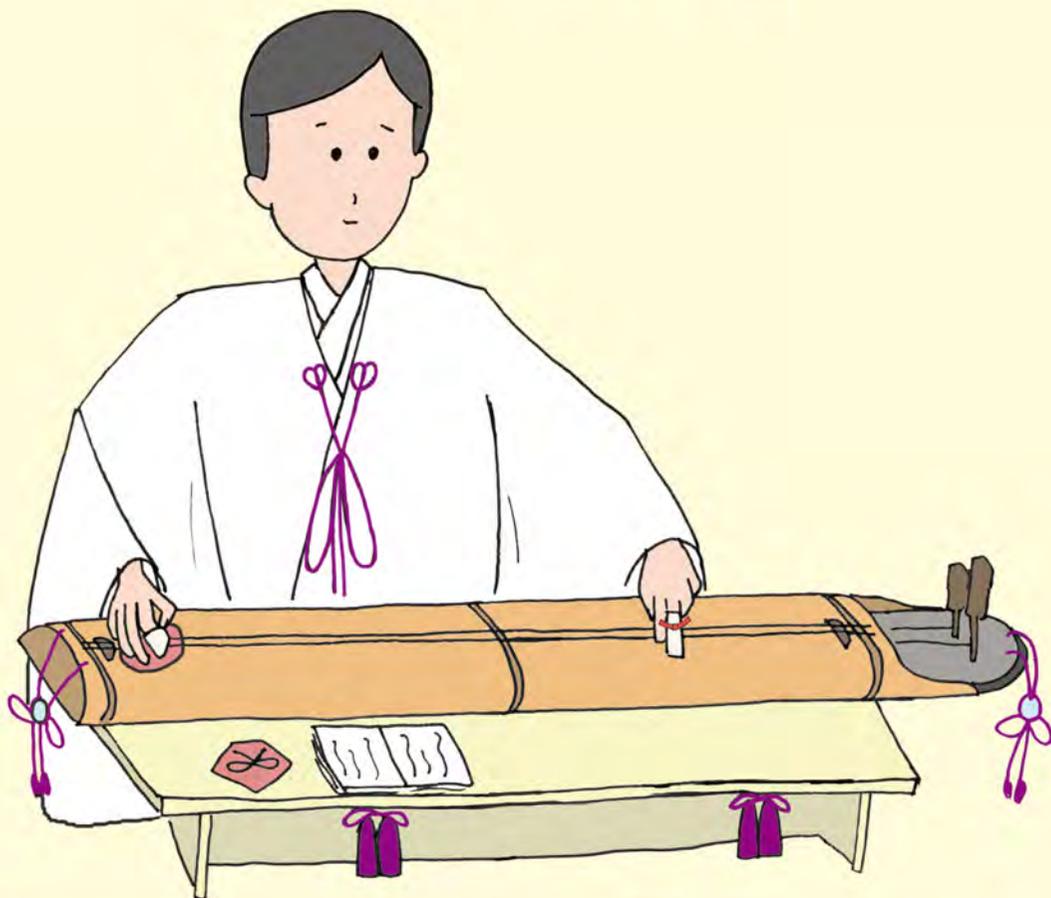


大本の祭典楽器

や く も ごと 八雲琴

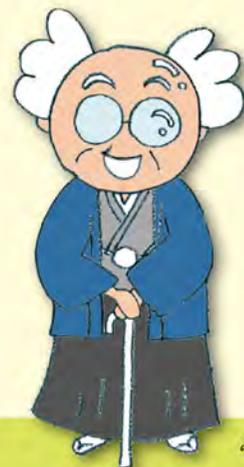


宗教的祭典を行う時、それぞれの宗教・宗派ごとに、さまざまな楽器が使われています。例えば、キリスト教のミサではパイプオルガンが演奏されますよね。神社で行われるお祭りでは、雅楽が奏され、仏教では木魚やかねなどが用いられます。

大本でも、ある楽器が使われています。

それは琴です。

今回は、大本の祭典で用いられる二絃の珍しい琴「八雲琴」を紹介します。



みろく博士



八雲琴には、絹糸でできた2本の絃が掛けられています

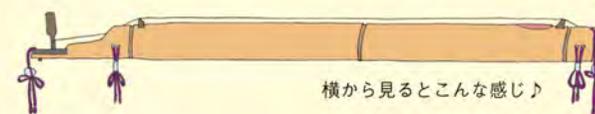
八雲琴の構造

八雲琴の胴は、長さ3尺6寸(約109cm)で桐や栗の木で作られ、半円筒形の表板と平らな裏板で構成されています。表板には縦に3本の竹節のような溝が彫られています。これは、八雲琴が当初竹で作られていた名残です。

弦には、絹糸でできた絃を用います。絃は、両脇にある2つのコマに乗せて張り、2本の絃が同じ音の高さになるように調律します。コマとコマの間には31個の「ツボ」が付けられています。



上から見るとこんな感じ♪



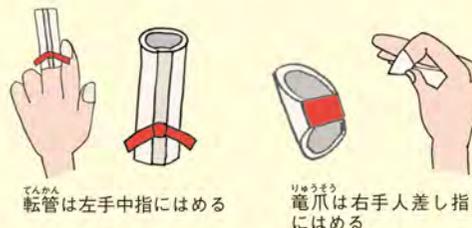
横から見るとこんな感じ♪



演奏方法

演奏時には、八雲琴を琴台に乗せ、左手中指に「転管」をはめて絃を押しさえ、右手人差し指に「竜爪」を付けて2本の絃を一緒にはじくように演奏します。2本同時に弾くのが基本ですが、曲によって1本ずつ離して弾くこともあります。

2本の絃をそれぞれ「天」「地」といい、同時に弾くことで、「天地を合わせる」という意味があります。



転管は左手中指にはめる

竜爪は右手人差し指にはめる

大本本部

綾部・梅松苑 綾部祭祀センター
〒623-0036
京都府綾部市本宮町1-1 梅松苑 / TEL 0773 (42) 0187

亀岡・天恩郷 亀岡宣教センター
〒621-8686
京都府亀岡市天恩郷 / TEL 0771 (22) 5561

東京本部 東京宣教センター
〒110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44 / TEL 03 (3821) 3701

大本ホームページ <http://www.oomoto.or.jp/>



<連絡先>





出雲で生まれた八雲琴

八雲琴は、愛媛県出身の中山琴主によって江戸時代末期に作られた二絃琴です。

琴主は幼いころに失明したことから、音楽の道を志し、京都で地歌箏曲の大家・菊岡檢校に三味線を学びました。琴主はその優れた才能が師に認められ、兵庫県養父市で師の代理として教授所を開きました。そのころ、琴主の視力が奇跡的に回復し、その御礼のため出雲大社へ奉仕に行きました。

出雲で祈願を続けていた琴主は、ある日、神さまからお告げを受けて、二絃琴を創案しました。それが、八雲琴のはじまりです。

大本の祭典楽器として

明治39年(1906)、大本教祖の一人である出口王仁三郎聖師(大本いろは「No.20参照」)は、京都の皇典講究分所(神職の養成所)で研修を受け、大本の祭典のあり方や祝詞を整えました。聖師が八雲琴のことを知ったのもそのころでした。

聖師はその後、明治42年(1909)に大本の祭典楽器として八雲琴を採用しました。初めて奏楽されたのは、聖地・梅松苑(京都府綾部市)に大本で初の神殿が建設され、神さまを奉迎する祭典を行った時でした。それ以来、八雲琴は、大本のあらゆる祭典で奏楽されています。

ちなみに、祭典で八雲琴を弾く人々を「伶人」とよびます。

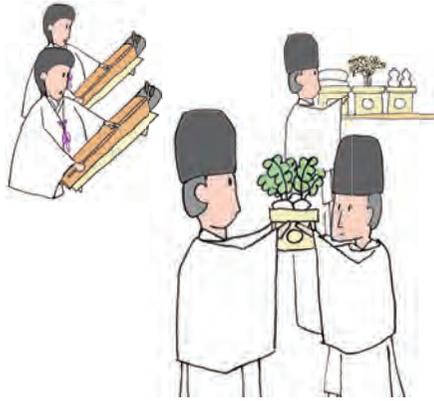
八雲琴の音色で祓い清める

笛の音色や、鈴やかねの音には、邪気を祓う力があるといわれています。八雲琴の音色にも、周囲を淨化し、人々の心をも祓い清める力があり、八雲琴は、基本的に祭典と神さまに奉納するために奏楽します。大本の祭典では、祭典に仕える祭員が斎場に入退場する時や、神前に供物(神饌物)や玉串をささげる時に、八雲琴を奏楽します。



祭典で八雲琴を奏楽する伶人(京都府綾部市梅松苑 長生殿)

八雲琴の曲には、古事記や万葉集などにある歌に曲をつけたもの、また神さまの神徳をたたえて作詞作曲されたものが多くあります。中には、歌詞のない曲もあります。大本の祭典では、祭員が入退場する時に、「管挿曲」を奏楽しますが、この曲には歌詞がついておらず、曲そのものに祓い清める意味が込められています。八雲琴を奏楽する伶人は、「祭典の場をお清めし、神さまにお降り願うという気持ちで弾くように」と心がけて祭典に仕えます。



八雲琴は世の中を平和に治める神宝

琴主は、神託を受けて八雲琴を創案したこと、「八雲琴は人間の耳を喜ばせるものではなく、神さまに奉仕するためのもの」としました。その思いから、八雲琴を娯楽に用いることを固く禁じました。

八雲琴は江戸時代末期から明治中期にかけて、広く普及しました。しかし、俗曲を奏楽することが禁止されたことから、「東流二絃琴」や「大正琴」などの新たな楽器が生まれました。

八雲琴発祥には諸説があります。古事記によれば、大国主命は素盞鳴尊から「生大刀」「生弓矢」とともに「天の沼琴(詔琴)」を授かり、これを使い天下を平和に治めたと記されています。この天の沼琴が八雲琴のはじまりであるとも伝えられています。



「八雲琴」の名前にまつわる話

琴主が作曲したものに「八雲曲」があります。この曲は、和歌の始まりと伝えられている素盞鳴尊が詠んだ「八雲神歌」に曲を付けたものです。「八雲琴」という名称も、この歌にちなんで付けられました。

八雲神歌は、素盞鳴尊の妻神である櫛稲田姫が打ち鳴らす弓太鼓の音に、国の平安と隆盛を思慮していた素盞鳴尊が勇気づけられて詠まれた神歌です(大本いろは「No.18参照」)。この弓太鼓は一弦琴の始まりで、八雲琴や弦楽器の起源ともいわれています。



弓太鼓
大きな桶(おけ)を裏返しに置き、弓道の弓をくくりつけて組まれています。梅の枝のバチで弦(つる)を打ちます

